

社会現象としての「ネット心中」

インターネットの匿名性の上に成立するもうひとつの絆…

富田英典

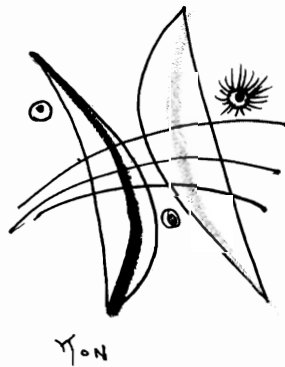
佛教大学教授

■はじめに「また三人、ネット自殺か
三重・名張の駐車場」

一二日午後二時過ぎ、三重県名張市夏見の市総合体育館駐車場で、荷物の積み替えをしていた運送会社の運転手(三〇)が、車の中で男性三人がぐったりしているのを見つけ、一一〇番通

報した。名張署員が駆けつけたところ、三人はすでに死亡しており、助手席に練炭入りの七輪が置いてあった。同署はインターネットを利用した集団自殺とみて調べている。(朝日新聞 二〇〇三年六月一二日 朝刊「名古屋」)

今年に入ってインターネットの自殺サイトで知りあった者たちが一緒に自殺す



る「ネット心中」事件が相次いでいる。マスコミは、これらの事件を大きく報道した。なぜ、このような事件が急が発生しているのだろうか。ここでは、インターネットとの関係からこの問題を探りたい。

■自殺者数の推移

(表1) 自殺数の推計

年次/区分	自殺者			自殺率		
	総数	男	女	男女計	男	女
1978(S53)年	20788	12859	7929	18.0	22.7	13.6
1979(S54)年	21503	13386	8117	18.5	23.4	13.8
1980(S55)年	21048	13455	7893	18.0	22.9	13.3
1985(S60)年	23599	15624	7975	19.5	26.3	13.0
1990(H2)年	21346	13102	8244	17.3	21.6	13.1
1995(H7)年	22445	14874	7571	17.9	24.2	11.8
1997(H9)年	24391	16416	7975	19.3	26.6	12.4
1998(H10)年	32863	23013	9850	26.0	37.2	15.3
1999(H11)年	33048	23512	9536	26.1	37.9	14.7
2000(H12)年	31957	22727	9230	25.2	36.6	14.2
2001(H13)年	31042	22144	8898	24.4	35.6	13.7

年/年齢	19歳以下	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上	不詳	合計
1978(S53)年	866	3741	3597	3641	2753	6024	166	20788
1979(S54)年	919	3654	3808	3796	2977	6163	186	21503
1980(S55)年	678	3261	3791	3911	3138	6166	103	21048
1985(S60)年	557	2548	3519	4936	4815	7147	83	24596
1990(H2)年	467	2226	2543	3982	4176	7853	99	21346
1995(H7)年	515	2509	2467	3999	5031	7739	185	22445
1997(H9)年	469	2534	2767	4200	5422	8747	252	24391
1998(H10)年	720	3472	3614	5359	7898	11494	306	32863
1999(H11)年	674	3475	3797	5363	8288	11123	328	33048
2000(H12)年	598	3301	3685	4818	8245	10997	313	31957
2001(H13)年	586	3095	3622	4643	7883	10891	322	31042

警察庁「平成13年中における自殺の概要資料」より

まず初めに、わが国における自殺者数の動向をみておこう。平成一四年七月に発表された警察庁による自殺統計によれば、平成一三年度の自殺者総数は三一、

〇四二人であり、前年比二・九%減であった。また、性別では、男性が二二、一四四人であり、全体の七一・三%を占めている。年齢別自殺者数は、「六〇歳以上」が全体の三五・一%、「五〇歳代」が二五・四%、「四〇歳代」が一五・〇%、「三〇歳代」が一・七%であり、高齢者になるほど自殺者数が増加していることがわかる。また、単純計算をすると一日に約八五人が自殺していることになる。(表一)

最近、注目を集めているいわゆるネット集団自殺では二〇代から三〇代が多いが、年齢別に見ると自殺者数が少ない年代であることがわかる。それにもかかわらず、世間の注目を集めた理由は、インターネットの存在にある。では、次にわが国におけるインターネットの普及状況と利用状況をみておこう。

■インターネットの普及

平成一四年版の情報通信白書(総務省)によれば、平成一三年末における我が国のインターネット利用者数は五、五九三万人(対前年比二八・八%増)、人口普及率は四四・〇%と推計される。この一年間で八八五万人の増加を示しており、平成一七(二〇〇五)年には、インターネット利用者数は八、七二〇万人に達すると見込まれている。また、世帯普及率については、平成一三年末には六〇・五%と全世界の六割を超えている。平成一二年末に三四・〇%であったことを考えると、世帯でのインターネット利用が急速に進んでいることが分かる。(図一)

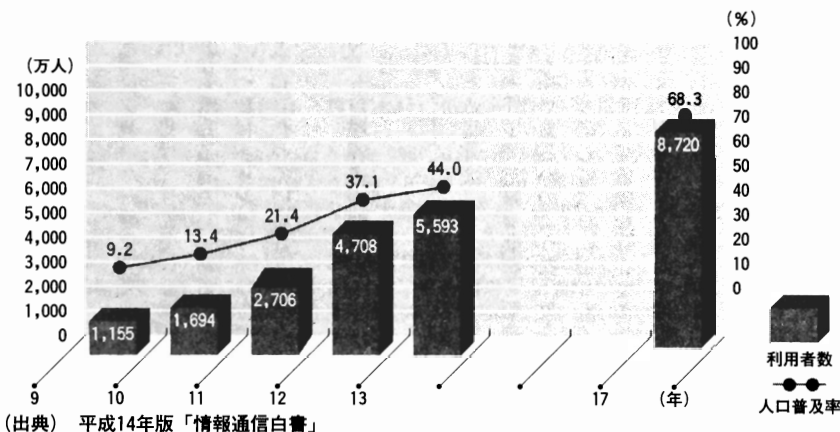
着実に普及しつつあるインターネットであるが、そんなインターネット利用者の六六・五%が「日常生活にインターネットは必要不可欠である」と考えている。また、四〇・四%が「毎日少なくとも一回」利用している。このように、インターネットは、日常生活を送る上で必要なメディアとなっているのである。(図二)

インターネットの普及状況を考えると、自殺に限らず様々な事件にインターネットが関係してきても不思議ではない。「インターネットで集団自殺」などというような表現をすること自体が時代遅れの感がある。ただ、それにもかかわらず、「ネット心中」「ネット自殺」などという表現が使われるのは何故だろうか。実は、一九九八年に世間を震撼させる事件が発生していた。それは、「ドクター・キリコ事件」である。

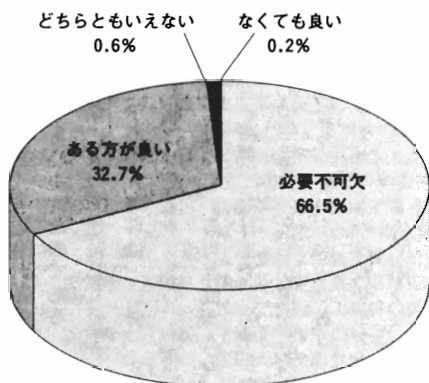
■「ドクター・キリコ事件」から「ネット心中」へ

「ドクター・キリコ事件」は、「安楽死狂会」というホームページにある「ドクター・キリコの診察室」の掲示板を通じて青酸カリを入手した東京・杉並区在住

(図1) インターネットの人口普及状況



(図2) 生活におけるインターネットの感覚



の無職の女性(二四歳)が自殺した事件である。青酸カリを提供した男性もその後自殺している。そして、マスコミは、一斉にインターネットの自殺サイトを危険視したのだった。しかし、その後、「ドクター・キリコ事件」は、その女性がインターネットではなく口コミで青酸カリを入手し自殺した事件だったことがわかった。ただ、翌年の一九九九年には、静岡市の無職の女性(当時三八歳)が、自

殺や安楽死をテーマにしたホームページを通じて、筋弛緩系薬品を入手し自殺をはかる事件が発生したのだった。

このように、九〇年代末における「インターネット」と「自殺」の関係は、自殺願望の人が薬物を入手し、送り主が自殺補助罪に問われる事件として注目を集めていた。それが、二〇〇〇年になり、インターネットで知り合った者が二人から数名で集団自殺する事件へと姿を変える。二〇〇〇年一〇月二五日に福井県北部の空き家で睡眠薬自殺していた二人の男女は、自殺情報を集めたホームページで一〇月の下旬に知り合っていた。死亡したのは、福井県内の男性歯科医師(四六歳)と愛知県内の元会社員の女性(二五歳)であり、二人が実際に会ったのは自殺する数日前だったという。

そして、今年に入ってから「ネット心中」が急増し、少なくともすでに一〇件の集団自殺が発生している。死亡したのは、大半が二〇代から三〇代の男女である。この一〇件の「ネット心中」事件に

は幾つかの共通点が認められる。ひとつめは、乗用車の中で自殺していること（埼玉の事件を除く）。二つめは、死因が七輪で練炭を焚いた一酸化炭素中毒であること。三つめは、住んでいる場所も年齢も職業も異なる者たちであること。そして、四つめは、インターネットの自殺サイトで知り合っていることである。

■ネット自殺報道の問題点

「ドクター・キリコ事件」では、マスコミによる報道は、ドクター・キリコがホームページで危険な薬物を販売する危険な人物であるかのような印象を視聴者に与えた。そして、なによりもインターネットがまるで危険な存在であるかのようなイメージを作り上げた。同様に、今年発生した「ネット心中」事件に関しても、マスコミによる報道はインターネットで知り合う危険性を視聴者に与えてきた。前述したように、わが国では平均して一日に八五人の人が自殺している。し

かし、実際に大きく報道されるのは、いわゆる「ネット心中」なのである。

実は、今年に入って連続して発生している「ネット心中」事件は、二月一日に埼玉県で起こった「ネット心中」報道がきっかけになっていいる可能性がある。何故なら、その後、六月までに発生した「ネット心中」事件の多くが前述したような共通点をもっているからである。実際に、インターネットの自殺サイトの掲示板を見ると、ニュースで知った「ネット心中」の方法が参考になるとい書き込みが認められる。

マスコミは、一連の「ネット心中」事件を人の死を悲しむというよりもインターネットという新しいメディアの新規性を危険なものとしてクロウズアップするかのようになり、センセーショナルに取り上げ報道しているように思われる。そのことと自身がその後の事件を誘発している可能性がある。

自殺サイトには、自殺したいという書き込みがあるが、それに対して、自殺を

思いとどまるように励ます書き込みが多数ある。それを読んで、自殺を思いとどまった人もあるだろう。しかし、インターネットで自殺を思いとどまった場合は、事件ではないために報道されない。客観的な報道が行われているとしても、「ネット心中」だけが事件として報道されることになり、結果的に視聴者にインターネットが危険な場所であるかのような印象を与えているのである。

■ネット心中と匿名性

自殺まで考える人が、インターネットを利用するのは、そこに救いを求めているからであろう。ただ、インターネットで巡り会った人と共感し、一緒に自殺しようとなってしまったときに悲劇が起こる。一人では自殺に踏み切れない人が、誰かと一緒なら実行できる場合があるのだろう。ただ、ここで注目しなければならぬのは、見ず知らずの他人と単に自殺願望を共有しているという理由だけで、

「インターネットと自殺」事件簿

～朝日新聞記事（東京本社）のデータベースより作成～

- 1998年12月15日 東京都杉並区の女性（24）が宅配便で届いたシアン化カリウム（青酸カリ）を飲んで自殺（ドクター・キリコ事件）
- 1999年8月27日 ネットで薬物入手、女性が自殺未遂 豊橋のホテル【名古屋】静岡市に住む無職女性（37）
- 2000年9月中旬 ネット購入の睡眠薬で自殺？ 滋賀の16歳女性
- 2000年10月25日 自殺HPで出会い心中 福井の歯科医、愛知の女性と。死亡したのは、福井県の男性歯科医（46）と愛知県の元会社員の女性（25）。
- 2001年2月27日 飯塚で2少女が飛び降り、重傷 メル友同士、自殺図る？ 福岡県の中学二年生（14）、名古屋市の高校二年生（17）
- 2001年4月6日 自殺予告にメル友が機転 神奈川の女性、通報 山形の男性、命拾い 山形県の男性（40代）、神奈川県的女性（30代）
- 2001年5月26日 投身自殺？男女が死傷 メル友きっかけ 名古屋・北区 愛知県の無職男性（21）、大阪府の無職女性（19）
- 2001年10月9日 マンションに女子高生の刺殺体、「メル友」男性は自殺 名古屋 名古屋市の男性（25）、同市の高校一年生（16）
- 2002年1月7日 和歌山の「メル友」119番救出 自殺図った札幌の女性【北海道】札幌市の女性（30代） 和歌山市の女性
- 2003年2月11日 埼玉県入間市のアパートで練炭による男女3人が自殺。埼玉県の無職男性（26）、千葉県無職女性（24）、神奈川県的女性（22）。
- 2003年3月5日 三重県津市で男女3人が乗用車内で練炭による自殺。愛知県の無職女性（20）、三重県の無職男性（24）、北九州市の女性（23）の男女3名。
- 2003年3月16日 山梨県上九一寺村で乗用車内で男女4人が練炭で自殺。大阪府のアルバイト男性（25）、埼玉県の男性（23）、静岡県男子大学生（22）、東京都の女性会社員（22）。
- 2003年3月17日 徳島県と香川県の県境近くの乗用車内で男女3人がガスコンロ2台と木炭で自殺。大阪府の男性（27）、愛媛県の女性2人（ともに23）。
- 2003年4月12日 千葉県市原市の林道に停めた乗用車内で男女3人が自殺。東京都新宿区の大学生の男性（26）、津市の会社員男性（33）、埼玉県川口市の栄養士の女性（22）が自殺。助手席に火のついた七輪と睡眠薬。
- 2003年4月21日 佐賀県富士町の林道で停車中の乗用車内で自殺関連サイトで知り合った男性2人が七輪で練炭を炊いて自殺。福岡県の職業不詳の男性（54）、東京都の無職男性（30）。
- 2003年5月6日 群馬県水上町でエンジンをかけたままの乗用車の中で男女3人が自殺。助手席と後部座席に豆炭の入った七輪が一つずつ。埼玉県の会社員男性（24）、東京都のアルバイト女性（30）、東京都の無職女性（23）。
- 2003年5月21日 群馬県上野村の林道の乗用車内で男性3人が自殺。車内には練炭と七輪。死亡したのは、東京都の大学生の男性（20）、千葉県の無職男性（30）、東京都のアルバイト男性（28）
- 2003年5月24日 京都市伏見区のマンションの一室で男女3人が自殺。室内には七輪があり、粘着テープで目張りされていた。京都市の無職男性（30）、群馬県の少女（18）、愛知県のフリーター女性（21）。
- 2003年6月6日 静岡県富士市の林道に駐車した乗用車内で男性4人が自殺。車内に練炭の燃えかすの残った七輪。愛知県の会社員男性（36）、埼玉県の無職男性（20）、大阪府の会社員男性（20）、東京都の無職男性（24）。
- 2003年6月12日 三重県名張市の名張中央公園内の市総合体育館駐車場の乗用車内で男性3人が自殺。車内には練炭が入った七輪。岐阜県の無職男性（30）、名張市の公務員男性（30）と埼玉県の会社員男性（26）。

なぜ「心中」のような行動ができるのかという点である。

ここでいう「心中」は、この世で遂げられない恋だからあの世で一緒になろうという「心中」とは異なる。「ネット心中」の多くは、名前も顔も知らない人と一緒に自殺する行為である。一人では死ねない。でも、誰かと一緒なら死ねる。知り合いでではなく、どこ誰か知らない人となら一緒に死ねる。それが「ネット心中」であろう。しかし、何故そのようなことが可能なのだろうか。

インターネットとは、匿名性の世界である。ただ、匿名とはいえ、インターネット上の名前をみんな持っている。そして、知り合いになれば情も移る。友情や愛情が生まれてしまうと、生きることに執着が生まれる。「ネット心中」が成立するには、そんな感情が発生していないことが前提条件となる。ただ、死の瞬間を共にする人である以上、誰でもいいはずがない。そこには、インターネットの匿名性の上に成立するもうひとつの絆が

存在しているに違いない。

■匿名性と親密性

インターネットでは、出会い系サイトも含めてたくさんチャットルームが存在している。そこでは、匿名のまま楽しい会話が繰り返り広げられてきた。匿名性と親密性が交差するところに成立する新しい人間関係に人々は魅了されている。「匿名だから正直に話せる」「匿名だから安心して話せる」というインターネットの世界が広がっている。匿名のままコミュニケーションが成立することによって、逆に相手のことを内面から理解することができ、場合によっては、友情や恋愛感情さえ生まれてくる。そんな体験をするなかで、「ネット恋愛」が注目を集め、「どの誰かということよりも、もっと大切なものがある」ことに人々はあらためて気がつくようになった。私は、そんなインターネット上に成立する親密な他者を「インティメイト・ストレンジャー」と

呼んできた。

今回の「ネット心中」では、自殺サイトと呼ばれるホームページの掲示板と一緒に自殺する人を集めるために利用されている。そして、自殺まで思いつめた人たちが、お互いの苦しみを分かち合い共感し、一緒に自殺するという悲劇を生んだ。そこでは、匿名性のもたらす親密性が、友情や恋愛感情ではなく、自殺願望の共有という形で成立している。死という人生最後の時を共にする相手として「インティメイト・ストレンジャー」が選ばれているのである。それは、自らの死の前にして、一緒に死ねる人として、「どの誰かということよりも、もっと大切なもの共有できる人」が選ばれているのであろう。そう考えると、「ネット心中」も理解できる。

■これからの「ネット心中」の姿とは

いま現在、問題になっている「ネット心中」は、自殺サイトで知り合った者た

ちが、自殺を決行する場所と時間と方法を相談し、実際に会って一緒に自殺するというスタイルである。「死にたい」「でも、一人では死ねない」という心理が背後にあるとするなら、そして、インターネットの世界がもつと身近になったら、彼らは実際に会う必要はなくなるかもしれない。

現在、インターネットを利用したコミュニケーションは、文字だけでなく音声や映像まで簡単に利用できる。インターネットにつないだパソコンで、画面に映るみんなの姿を見ながら、別々の場所で自殺することが起こるかもしれない。乗用車の中で一緒に自殺する場合は、全員が死ぬことを確信しているだろう。一緒に死んでくれる人がいることが重要であるとするなら、パソコンの画面に映った友の姿を見て、一緒に自殺してくれることが分かれば、同じ場所にいる必要はない。インターネットによってそれぞれがつながっていることが重要なのである。インターネットの特性とそこでの人間関

係を考えるとき、そのような姿のほうが「ネット心中」にふさわしい。ただ、全員が本当に自殺したかどうかはわからない。

■おわりに…インターネットの中で蘇生

本来、「ネット自殺」は、インターネット上でのトラブルを悲観して、インターネットの世界から姿を消すことをさす言葉として使用されるべきである。「ネット心中」も同様である。インターネットの中でトラブルに巻き込まれ、ネット上から姿を消してしまいたいと思うこともあるだろう。そのような場合を「ネット自殺」と呼ぶほうが分かりやすい。しかし、実際には、インターネットを利用して、本当に自殺してしまう行為を「ネット自殺」「ネット心中」と呼んでいる。それは、まるでインターネットが現実の自殺を誘発しているかのような意味で使われているように思える。

むしろ、現実の生活の中で死にたいと

思い詰めた人が、インターネットの中で生き続けることができる方法を考えることはできないのだろうか。インターネットの中で、もう一度人生をやり直すことができないうか。続発している「ネット心中」が、「ネット蘇生」へとなるような仕組みはできないのだろうか。それは不可能ではない。何故なら、それは心の拠り所を現実社会からネット社会へとシフトすることであり、すでにそのような生き方をしている人たちが多数存在しているからである。仮に、自殺を考えるほど何かに追い詰められたとき、自分の周りに相談できる人がいなくても、インターネットで知り合った友達が支えてくれることは十分にありえる。その善し悪しは別にして、インターネットが現代人の生活の一部となり始めている今日、私たちはもう一度「インテイメイト・ストレンジャー」という存在の重要性に注目し、インターネットの世界を人々が生きる場所として積極的に考えるべき時がきているのである。